青山御流
活花手引種後篇
四

玉

雅

嘉永六年秋
日稲園學人書

かんちく
紫竹
つばき
山茶
嘉永四辛亥初春挿於
華頂山小書院
花器
光格天皇御遺物白銀牡丹花黄金
華頂山什寶
攝津國浪速
蕉雨亭秀月
通稱
大信寺典澄
大僧正顕道

一葉(むらん) 五十一葉
嘉永元年戊申九月朔揷於
洛東祇園社侍幸之間
互春齋 岩田英雅
器 江府 翠松亭所鑄
○四
○活花手引 巻之四
萬年青(おもと) 二花 十七葉
船形鋏組留
丹後國岩瀧
思燕齋晒
通稱 小室佐喜藏
玉峰

中山大納言忠能卿
騷人足奇思香草此
君子況復霜下傑清
芬絶門菖氣禀金行
秀德備黄中美古來
鶴髮公翁殘英飲其水
古老泉作應搜書之
忠能
嘉永五年壬子初冬挿於
園御殿奥御座之間
菊七種
小野川 緋の丸 寒菊 黄白 時雨
竹器銘 四方乃山里
山城國准御會頭
美松亭勁節
通稱 佐竹善兵衛源義忠

山茱萸（さんしゆう）
山茶（つばき）　赤二花

器亀齢堂鋳

色のしみは
いく田神山の
まつ秋を
古須乃まにうつし入り　正裕

紫溟軒紅霞
通稱　別所直次郎　藤原高裕

萍蓬草（かうほね）　十一葉　三花

ゆく水にうきてたゞよふ
あはれなる

寛和

壽鳳齋清雅
通稱　服部辨次郎

千種侍従有文朝臣

有文

貴人盆　打雜浪

錦章亭逸雅

主石　中院右大臣通躬公御銘

玄圃石

砂簟笥

秋海棠

淡月軒梅雪

通稱　西田源助

東皐寫

山櫻（やまざくら）
松（まつ）

器 龍文堂銕

泰松軒和暁
通稱 東原主馬 源泰高

石年写

常盤木何をか道と松をのみ絶代まで祝ひし
花の木数おほかれど桜を万代まで祝ひし
松は霜雪の中にいろをかへぬ操を標となし
春つきるまで絶えず桜も花盛となりて
見るべきさかりは千歳の冠辞に見へぬ事のなき類
まれなりけり道ハ此道をまつ見よかし此道を
知られけるときは桜と松の色と花の香り
ながく世の中に只世に桜あらと方なんとまでも
たのしみ此花瓶の葉の底をしるも根元
知られぬる事は此道にて

長澤伴雄

燕子花（かきつばた） 三本

なかまつく浪への
うきまいつさん
つきあかりかかを
きやまりの程

春恵

隣松軒友石
通稱 梶山勝右衛門

菊（きく） 小の川 四十一輪

川水かうまを
よろひを小の
仙人の手代の

むさふ
袁久のかか

敬忠

壽鶴軒松翠
通稱 石田赤七

青柳（あをやぎ）　薔薇（さうび）
菜花（なのはな）

竹器銘　洞鼎

梅章齋和石
通稱　高木傳右衛門美成

三條西参議左中將季知卿

水僊（すゐせん）　花五本　葉二本
花器　江都　凌雲齋作

大和國奈良
壽仙齋方稚
通稱　齋藤利兵衛定方

黄冠素服両嬋娟挿
向瓶中好許肩摩外
高標誰与伍同舟李
郭是神僊
梅花水仙同瓶図
宮京龍

梅（うめ） 水仙（すいせん）三本 火架（ごとく）留

拂雲齋吟雅
通稱 益井喜三郎

冠棚

山茶 紅妙蓮寺 四輪 本阿弥白 三輪

水仙 二本 砂留

花器 江都 渡雲齋作

水仙神骨清絶織如之梁玉清之山茶鮮妍石氏之翔風羊家浄琬之

摘瓶史語 明軒書

流霞亭梅雅

通稱 片山權兵衛

婆羅山丹 五本
霞谷齋文雅
通稱 田原文次郎
一葉 十九葉 嫩芽 四葉 二花 二蕾
壽樂齋有光
通稱 菊岡新次郎
器 亀齢堂 鋳

檉柳(ぎよりう) 礒(いそ)かゝり

専留 燕子花(かきつばた) 三本

凌雲齋貞雛

通稱 原田新助

移来檉柳影斜日在西欄忽見

羅帷上淡写水墨鸞 星舲

一家て まつてはくれす 杜若

梅通

挿梅花
松雫軒菊溪
通稱　廣田嘉兵衛
挿福壽艸
壽谷齋隆雅
通稱　海老名謹吾　源秀一

首香何粉迭隨時諫
莖高低左揮枝安置
性情如畫苑剔除要
勿換天姿裁惆翦露
方成銀映殊呈紅與綠

宜於淨缾君掌揮訣
一篇披閲可餘地
嘉永壬子三朱明月
陶所生題

水楊
番牡丹

伊豫國松山
南松齋鯉居
通稱 關松之助

淞歩恩
ゝ波色澄
仙風道
骨冷於
氷肯特
作賦人
何在素
月碧雲
情不勝
水僊花
柳所生

浅葱水仙　五本

大和國奈良
壽英齋金蓮
通稱 小坂孝三郎

ちゝやはゝのよにハいでんちやしにこのきさらかまゐりつくしをえめ
ろいまれなるあるちこえすしなわきとりえへてしうすふあるらえ
ものつゆてまゝ生花とふるのはなしゆくをしめてをるとれ
抑もさまゝわへてゆのにいけなりて花葉さへ葉さへ枝さへし
こなりんてのよに其ひ出なくむのとりつゆ折りひたされあり中
まかれなりしの秘伝のからえとよきよそひし八稿ハあらて本の
わなりみえうへこしつるみれなすよかすんてゝのこれをなすきと
それしの古伝のなくのよそするしおりあへてまひなむおりれあそれ濱
まれあらすこともひくむ紹縮のたまうれハこのわのえてあ併すや
いつなりもふてゝへて杖すとれきくのちらせをあらそらせるとおもとに
えすしくさえるところすわなおれいまのよのひとのあやを折る
かつ世の神ちられこきてく下のはなるしつらんとよのひとそなみ
くすしれわさするのへあらしとてそおりてまらあめどうら
おりくらうしましれ [illegible]

其のもの 梅香居

百合（ゆり）七花

水月軒栁枝
通稱　橋本利兵衛

青柳の糸ゟと

連にしだし
樓斗菜（をだまき）

一毛齋瀬石
通稱　中野忠八郎

棠梨（やまなし）
躑躅（つつじ） 玉や紫

問水齋湖舟
通稱 吉田甚助

製 金屋五郎三郎作

蔍草（さんかくゐ）
萍蓬艸（かうほね）

萬碧齋一水
通稱 小谷早太源一清

一葉（はらん）十三葉

さしのべた廣葉をそれハみくまのゝ浦のはまゆふおもわ忍るゝ

忠秋

丹後國岩瀧
翠松齋林南
通稱　千賀五三郎

季山画

棣棠花（やまぶき）　むさしあぶみ

專留

組方玉川

あふみ路むりをかゝるも

芸阿人

弘正方

花そとハいはぬ色も思ふ玉河

來青齋藍水
通稱　服部隼人

鉄鑢挿鐙草
上呰棣棠英
玉水憶遺詠
寫来傳寓情
長門山根温知

百年写

黒松(くろまつ)
鳳尾竹(ほうびちく)
梅(うめ)

大和國奈良
壽養齋開雅
通稱　藤木粂三郎

皇國活華赫隆考

今皇國に盛りに行なる活華の技の世に發起せしつる起元を熟考るに遠き神代に伊邪那美命の霊を祭るに花を用ひ斎祭れるなし古典の上に昭々たりしを其の斎き祭りつる處を花窟といふよしを増基法師が紀行なるものに今も紀伊國熊野郷に其名存ると聞へたらん三枝祭るは以三枝花飾酒罇祭といふ事令抄御典にあり見えたれば太古より木草の花をもて神を祭り霊を鎮和せ奉る事は皇大御國の古式なることはいふも更なりされども當時其花を奉りし状をいふに有けん今より推量て知るべきならねど本末其花を奉りて其神の御心に賞翫玉ふべき料なれば花の中にも美麗しきを選ぶ故の美麗しきに選ぶる花の中にも其枝葉の格好を風姿よろしき可愛き様に採成して獻りしは違ひ有まじき如斯花を選び風姿を採成しは則活華の技の起りにて濫觴といふ有れるものなれども皇國は萬事おほらかにして細少なる技などは委曲に記し傳へざる國風なれば古書にも瓶に花をさしし事のさえて規則を正しし状抔は漏て傳へざるを吾 園の御家には古より此技の傳ありて 後花園天皇の御宇にかしこくもやんごとなき由緒ありし有て 中納言基秀卿と白せしがなほ嚴重に花則を定め玉ひしよりぞ有ける然を尋常の説に此頃彼相阿弥が華本非枝茶法を轉じて今の茶道を開き初つるを其茶道の乃くへるを常に

いけ花を用ゆるより茶道に牽引れ義政公の物好に化せらるゝまゝに
此時より權輿つまりの如くいひなしまつりしにもあれ既に北畠
玄恵法印が喫茶往来に卓懸金襴置胡銅之花瓶机敷錦繍立
鍮石之香匙火箸嬋娟兮瓶外之花飛疑於呉山千葉之粧芬郁
兮爐中之香誤於海岸三銖之煙とみえたれば如く古くより花を
瓶にさして翫びつる事といふも更なり彼義政公の時にも書院の
御飾に挿花を用ひましし事羣臺観左右御飾記にみえたれ
如くなれど當時よりいとしき花器花臺抔の設の有つる事は著明
知られざり然るを此伎の濫觴を諸家諸流に傳へる趣區々にて
或は印土の釋迦文佛が拈華微笑に起るといひ或は阿羅漢阿難に事

發るといひまたは赤縣の袁仲郎が瓶史張謙德が瓶花譜陳淏子が
花鏡などに瓶花の事を記せるをみて是を權輿となして論へれ
ども其流其流によりて尚さまざまにいひもしなれど如此その説れ
一定ざるはとにかく皆其流祖の己れ／＼がさかしらに推量り定めつる
説なれば取れるべしそも／＼如此印土赤縣にも花に携る事どもは
あれど唯佛に供じまたはおのれ一己の愛翫の為のこととも皇國
にては高貴尊重のかた／＼は云も更なり士庶の上に渉りても時に
ふれ節に當りて常に此伎を用ひて活花を愛翫するならはしと
成つるは元来草木の花の萬國に勝まで立派なる美麗さが故なれと
彼赤縣印土にとりてはつらふ類もあらねば其草木のそのの殊に

美麗き由縁は神代に五十猛神の天上より木種を多に持下り給へ
ありしを諸審國には殖給はずして持て皇國に殖置給へりしが
其木種より生出つる樹どもは萬國に勝れて喬木となりつるにて
彼景行紀なる筑後國の歴木風土記なる近江國の栗樹を始め
古事記に見えたる和泉國の大木伊豫國の桂木などいと多く
聞え殊に木花之佐久夜毘賣命をまをす乃御名を櫻大刀自神
とも白しまをせし櫻樹の靈とませるを今尚華としいへば此花に
限るがくはすべて乃花は此神こそ知しめすらめ其乃成生ぬる
叒木なる扶桑の大樹の生出る地なるから皇國乃總称を赤縣
なり扶桑と唱へ其華乃可愛を稱誉て東華青華と云榮せ

しかとえたる扶桑樹に預れる事なるよしは平田翁が考記に見え
坐りけれバかく花祖とませる神の生ませる國にして他國にもちこと
華をめでて稱ふ皇國にしも今活花の伎は眞盛に栄ゆるも
ことなり天つ神の御量にして久々能智野椎乃神等の山野
乃花を持別て幸ひ給へる神事なるらんと我思ゆるがしこくて吾
園御家乃活華乃道はしもいと古くは世に普く御家流と唱へ
来ありしが此伎の支流八衢に分流て數々のながれとなりつるまゝに
其源に青山といふ號を冠らせて呼別つることゝそれは
天照皇大御神の高天原に御座時須佐之男命乃種々荒悪行事
をなし給ひしうちに青山をからす山となし給へる事の有けるが

後にその荒魂の神に坐る五十猛神の前にいへるごとく木種を
多に持下りて皇國に殖生し給へる功積によりて勝て木々の立
榮え青山のときはかきはなるいとも深き理ありて
靈元天皇の御宇に　大納言基香卿に白せるが青山の社を斎祭
給へるよりかくは唱へ奉つるなりされど尚此ことわりは一字も委しく
辨へいはんとすれども聊憚る事どもなきにしもあらねば
うへ吾汲流にのみ車を引くや思ふらん人もこそ有べけれとて漏
しつ阿波礼古にも例稀なる昇平き御世に生れ合ぬる
風雅事を常に翫ぶ事の歡く喜しさはつゆばかりもいとど益
今往末までも此伎の世に栄え行ぬ處ありさまに朝日の艶ふ

花櫻のごとく彼漢人の言立に木徳仁風と慕ひしごとく
其風雅事字御がたうふれや弥重ねめやと
草も木も苔むすまで巖と成りぬるまで栄行べき花の道

嘉永六年

錦章亭水谷有正しるす

跋

良家小姐雖五官端正吐屬清雅固非天僊化人一見消䰟褫魄者也夫花亦然其在圃畦未經矯揉者雖端正清雅如良家小姐奈有些呆氣一經矯揉而挿瓶盤則態度

絶塵如天仙化人洵足以消䰟褫魄矣此插花技之所以不可已也 壽松園主人插花者流之巨擘也屬者著活花圖說其插法變寫位置工麗秀色可餐余評之曰滿冊會評多天仙化人若有人嫌其戕賊花

并以為媚態則是避毛嬙驪
姫之魚鳥麋鹿耳余亦未
如之何
嘉永癸丑桂月篙水學人騶
撰并書